

## 「音楽を創作すること」 三宅珠穂 (Tamaho Miyake)

作曲・即興演奏・既成曲の演奏・それらの指導を行っている立場から、音楽を創作するという行為について少し触れたいと思います。作曲や即興演奏を行っている、それ自体が特殊な技能のように言われることがあるのですが、「そんなことはないですよ。音楽は誰でも作れますよ。」と熱弁しても、どうやら本気にされていないようで歯痒いばかり。

「楽器を演奏したりバンドなどで活動したりしているうちにオリジナル曲を作るようになった。」「ゲーム音楽やアニソンなど好きな音楽があって自分でも作りたくなった。」「コンピュータ音楽が好きで自分でも作るようになった。」自ら音楽を作り始めた人は、やってみようとしただけなのです。

人はもともと音楽を作る力を持っていますが、世の中には音楽を創作しようとしたことのない方もいるでしょう。小学校の音楽で創作的活動を行うことも学習指導要領には常に明記されていますが、なぜか音楽の創作はあまり行われてこなかったようです。指導する側に「音楽の創作は難しい」という先入観が出来ていて連鎖しているのでしょうか。本当は、作文や作詩、絵を描いたり造形物を作ったりするように、音を材料に自由に創作すれば良いのですが、出来ないと思っている人は未だ自分の方法をみつけ出せていないのかもしれない。

音楽をやっている人は「こんなに面白いのに音楽をやらないなんて勿体無い」と感じておられると思いますが、私もそれに加えて「こんなに面白いのに音楽を作ってみないなんて勿体無い」と感じています。私の生徒は全員、楽器の演奏以外に即興演奏と作曲を行いますが、これまでに出来なかった人は一人もいませんでした。3歳でも勿論出来ますし、70代からピアノを習い始めた方も作曲なさっています。「好きかどうか」はやってみないとわかりませんが、少なくとも音楽を作ることは誰にでも出来るのです。

そして、音楽の創作は新たな自己表現の手段をもたらしてくれます。自分の気持ちに沿う曲を探してそれを演奏することでも自己表現は可能ですが、音楽を創作することで、もっとストレートに自分の内なるものを表すことが可能になります。実際、私の生徒の作曲作品や即興演奏は方向性がばらばらで、その人らしい個性が表れています。

音楽を創作することのメリットには、こんなものもあります。それは音楽を、「作る側の立場」から眺められるようになることです。創作を経験すると音楽に対して、「なぜこの音にしたのだろう。」「自分だったらこうするのに、なぜそうしなかったのだろう。(またはその逆)」「やっぱりこうしたか。」というように、作曲者と同じ作る側の視点からアプローチできるようになります。そうすると、それまで見えていなかったものが見えてくるのです。演奏表現に迷った時に、答えをくれたり、選択肢を増やしてくれたりすることもあります。楽しもうと思って音楽を聴くのと、自分で演奏するための参考にしようと思って聴くのと、自

分が創作するための参考にしようと思って聴くのでは、自ずと音楽の聴き方も変わってくるのです。聴き方が多様化すると興味の対象も変化し、音楽の楽しみ方や聴く音楽の種類も益々広がっていき音楽生活が豊かになります。

現代では、動画、絵画、エッセイ、詩などあらゆるジャンルの作品がインターネット上で発表されています。そこでは、様々な人が様々な作品を発表しており、その発想や内容において、プロとアマチュアの区別が曖昧になってきています。音楽の世界でもそれは同じで、これまでになかったような興味深い音楽作品が次々と生まれ続けているのです。私自身も自分という狭い世界に安穏とせず、多種多様な音楽を聴いて自分の音楽の世界を広げたいと感じています。そして、音楽を創作することを特殊なことだと思わずに自然に行う人が増えていくことが、音楽界を活性化することにも繋がるのではないかと期待しています。